

erudio 6



目 次
センター長より	2
副センター長より	3
学務部長より	4
新分科会代表者の抱負	5
入試部門	8
全学共通教育企画・実施部門	10
教育評価・改善部門	14
岩手大学全学共通教育の概要(改訂)	18
専門教育関係連絡調整部門	19
学生生活支援部門	20
就職支援部門	22
現代GP	24
プロジェクト(放送大学)	26
プロジェクト(アイアシスタント)	27

「世界がぜんたい幸福にならないうちは
個人の幸福はありえない」

「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に
意識してこれに応じて行くことである」

宮沢賢治『銀河系をめぐる星』

自らの星を見つけ、
自らの星座を築け！

岩手大学 総学長 村直之介

センター長より

「実績と来年度の課題」

センター長 玉 真之介



総合化、次の課題は？

平成18年度の大学教育総合センターは、大きな変革の年でした。1つは、3部門から6部門への総合化です。中でも専任教員を配置しての入試部門の設置は、大きな意義を持つ改革でした。永野教員がセンタースタッフ会議や就職支援部門会議に参加することで、入試に関する情報がセンター全体に共有され、逆に永野教員の200校を超える高校訪問に教育や就職状況の情報が反映されることになりました。

今後の課題は、就職支援部門が実施した147社の企業訪問から得られた情報をいかに教育内容や評価・改善に活用していくかなど、更なる部門間の有機的連携を高めていくことです。大学教育センターの大学教育総合センターへの総合化は、間違いなく成功でした。各部門会議の定例開催によって、審議決定のスピードが向上し、企画立案の力も少しずつ高まってきています。兼務教員に加えて、職員の企画立案能力を高め、経常業務の遂行にとどまらず、PDCAサイクルを回していくことが目指すべき方向です。

旗印は、「学びの銀河」！

現代GPの採択によって、「学びの銀河」が本学の全学共通教育の旗印となりました。コアの部分には宮沢賢治の生き方・考え方を置き、持続可能な未来をキーワードにすべての科目を関連づけていくというプロジェクトです。それに加えて、地域的具体的課題を授業科目に取り込むウイング(ローカル)と世界の大学とESDで連帶するというウイング(グローバル)を広げて進めたいと考えています。

今年、6月9、10日に東京農工大学で開催される大学教育学会の大会テーマは、「持続可能な社会と大学教育」です。基調講演は、吉川弘之元東京大学総長、シンポジウムのタイトルは「持続可能な社会と教養教育」で、シンポジストの1人として岩手大学の取組を私が報告します。ESDを高等教育のすべての分野に織り込むという取組は、イギリスでは国家戦略として取り組まれています。岩手大学は「学びの銀河」の旗印を立てて、日本の大学教育におけるESDの先頭に立ちたいと考えています。

分科会、次の課題は？

合意された改革実施案に基づいて全教員の分科会登録がなされ、分科会の活動が開始されたことは、本学の全学共通教育にとって画期的な出来事です。それにより、共通教育への関心が広がり、専門を生かした新たな教養科目の開設や共通教育と専門教育とのつながりが生まれてくることが期待されます。分科会が学部を超えた新たな教育のネットワークとして、FD活動をはじめ着実な活動が定着することが平成19年度の課題です。

アイアシスタントの稼働により、コースや課程、学科はもちろん学部も超えて、本学の教育は透明性が高まります。それを基礎に、授業を公開して、互いにアドバイスするFD活動が次の課題です。ケチを付けるのではなく、授業を良くするためのアドバイスがこれからは必要です。学術論文も人に読んでもらって内容が充実するように、授業も人に見てもらって必ず良くなります。まず、私の英語の授業を公開しますので、ぜひ授業参観をお願いします。

副センター長より

「全学共通教育改革の実施のために」

副センター長 岡田 仁



教育は学生と教員双方にとつて個人的な努力の占める割合が非常に大きいことは言うまでもありません。それと同時に、私たちの所属している大学も一つの機関であるからには、機関としての使命や目的を持っています。

しかし、各大学固有の使命や目的については比較的最近までその存在、さらにはその必要性までを含めて、あまり意識されていなかったことも事実です。「私の」研究の場と「私の」識見を教授する場を提供するのが大学の使命であると、私なんかも考えていた節があります。こうした考え方が批判の対象となり大学教員の意識改革が叫ばれて大分たちます。すでに岩手大学でも大学としての目的・目標を定め、年度計画を立ててその実現を社会に公約しています。一蓮托生だと考えれば私たち一人一人の教職員もこの公約の実現に責任を負わざるを得ません。また、負わされるのではなく負ってやるのだという積極性こそ、自由な精神と自主性に富んだ大学教職員にふさわしい覚悟と言えるでしょう。少なくとも精神衛生上はそのほうが得策です。

しかし、責任を負ってやるのだと見得を切れる前提は、方針の決定に何らかの関与をしていることです。どこかの誰かが勝手に決めたことに責任を負えと言われても無理です。また、責任なぞ考えなくていいから言われた通りにしなさいと言われて、はいそうですかと喜ぶ人もいないでしょう。全てが直接間接に大学の経営に関わってくるとなると複雑な要素の絡み合いがあるでしょうから、私たちの関与の仕方と程度に差が出るのは当然ですが、構成員の関与の度合いは大学の活力と直結しているように思われます。

さて、大学教育総合センターは入学から卒業まで学生にかかる事項について教育機関としての岩手大学の方針の決定に与ると同時に、全学共通教育についてはその実施に責任を負っています。このラインで考えると大学教育総合センターは岩手大学の方針を先生方に押し付ける中間管理機関と位置づけられそうですが、もちろんそうではなく、センターの活動方針は運営委員会や各部門会議での審議・検討により決定されています。

いまさらのように、こんなことをここに書かせていただいたのは、数年の議論を経て実現した全学共通教育改革、特に全教員担当体制について、その実りある実施にぜひとも積極的なご協力をお願いしたいからです。幸い、新分科会には全ての先生に参加していただき、教育目標の設定をはじめ実質的な活動が開始しました。また、長年の課題であった高年次向けの教養科目の枠が実現し、「ジェンダー」、「環境」という最も現代的な課題をテーマにした科目が開講されます。「高年次課題科目」の設定は制度上の改善でもあります、それ以上に、ご自分の専門研究を教養教育に生かそうとする大学本来の教育のあり方が自動的に示されたことに大きな意義があると思います。また、学生の日本語(国語)能力の向上の要請にこたえる科目の新設や本学の宮沢賢治研究を生かした科目の新設など、改革案を有効に活用していただいている。その他、外国語教育の改革、全学的なアイアシスタントの導入など先生方の積極的な関与なしには十分な効果が期待できないものばかりです。これらの改善や導入も急に決まったものではなく、数年の期間をかけて各方面の意見を聞きながら立案されてきました。ぜひ「私の」教育改革、「私の」アイアシスタントとして今後も建設的なご意見・ご提案をいただければ幸いです。

学務部長より

「大学教育総合センターに関わって」

学務部長 畑中 文穂



大学教育センターが大学教育総合センターとリニューアルして1年が経とうとしている。この間にセンターの教員スタッフも充実し、全学の協力を得つつ様々な事業を展開しながらも試行錯誤の1年だったと感じられる。象徴的な出来事は、全学共通教育体制の確立とアイアシスタントの導入ではなかつたろうか？

全学共通教育体制の確立は、本学の中期目標に掲げられた「本学のいずれの学部学生にも必要な教養的基盤と基礎学力を備えさせる。」という教育目標を達成するために、責任体制を明確にした具体的な実施案を提案し、全学の合意を得て、平成19年度入学生から実施されることとなったところである。これに伴う事務部門への直接的な影響は、カリキュラム編成である。特に外国語教育の集中的授業形式を導入することとなつたが、この方策は、学生の取り組み姿勢もさることながら、実施後における学生へのケアが重要と言える。つまり、1年次に集中的に語学教育を受け、その時点では、飛躍的に向上が図れるだろうが、2年次の1年間が空白になり、専門教育を本格的に学ぶ時点までに語学力がどれだけ維持できているか、大きな課題を含んだ方策と言えるからである。この課題解決の一方策として、現在センターで提案しているマルチメディア教室の整備は、語学教育の新制度導入に伴い学生に対する教育設備として、必要不可欠のものと位置づけられる。学務部としても予算措置等について関係方面に強く働きかけていきたいものである。

一方、アイアシスタントは、最新のIT技術を駆使して教職員・学生の利用しやすさを念頭に開発されたものであるが、後に述べる教育に関する「外

部評価」に大きく関わる事項である。教員及び学生の積極的な利活用を期待するところであり、特に教員にあっては、シラバスの掲載は最低限実施して欲しいものである。

それにしてもセンター業務は、全学教員の理解と協力が得られなければ進められないことを肝に銘じておく必要があることをあらためて痛感した1年である。蛇足ですが、アイアシスタントの開発作業及びシラバスの入力時期が遅れたことに伴う調整等で、センターに關係する教員が大変な努力をされたことに敬意を表したい。

本学の中期計画に掲げられている教育に関する項目の「具体的な対応」方策として、アイアシスタントの活用が随所に記されている。言うまでもないが、いかに大学としてその成果が期待されているかを伺い知ることが出来よう。本号が刊行される時期には、アイアシスタントが本格稼働され、順調な滑り出しどなっていることを切に願うものである。

大学は今や「外部評価」を避けて通れない時代である。本学においても本年度認証評価を受け、その結果は大変好評価と受け止めている。平成19年度は、暫定評価を受けるための準備年である。評価などは無縁だった国立大学護送船団時代から脱却し、地方大学としての存在価値が問われる時期に、いかに岩手大学らしさを強調し、評価資料としてまとめ上げ得るか、真価が問われることだろう。教職員一体となつた取組が必要であるばかりでなく、教育・研究はもちろんのこと学生を取り込んだ地域連携においても、常日頃の積み重ねこそが重要と言えよう。

いずれにせよ、評価疲れとならないよう、各人が健康に留意され、より良い岩手大学とするべく英知を結集し、理想の大学につくりあげていきたいと願うものである。

新分科会代表者の抱負



「外国語」
分科会代表
斎藤 博次
(人文社会科学部 教授)

外国語の分科会代表となり、どうやらますます忙しくなりそうです。19年度は全学共通教育科目の外国語改革の1年目となるため、旧カリキュラムと新カリキュラムが同居し、そのために非常勤講師の数が大幅に増えることになりました(20年度以降は減ります)。そのため、新たな非常勤講師を探すことになり、正月明け以降、てんてこまいの生活となりました。ようやく人は決まりましたが、「アイアシistant」のシラバス入力についての事務連絡が未だに続いている状況です。改革の影響を受け、モナッシュ大学の英語研修の単位認定や資格試験の単位認定についても、問題が生じました。こうした問題については、19年度中に解決策を見出したいと考えています。今後も分科会の方々のご協力をお願いいたします。

かりがたいが、学生からの事前調査等も加味し、もっと魅力的で価値ある集中講義の実施プランを考えていきたい。



「情報基礎」
分科会代表
佐藤 拓己
(工学部 助教授)

今年度から初めて情報基礎の代表をさせていただいています。カリキュラム改正にむけて全力で取り組む所存ですので、よろしくおねがいいたします。



「思想と文化」
分科会代表
小林 瞳
(人文社会科学部 助教授)

旧分科会から新分科会への再編がなぜ必要になったのか? いくつか理由はありますが、その第一としては、かつての分科会が全学共通科目の授業担当者から構成されていなかったために、授業改善の議論をする場として十分に機能しなかった点が挙げられます。新分科会は実際に授業を行なう教員たちを構成メンバーとする形になりました。ただし、分科会がうまく機能するためには構成人数が適正なサイズ(20~30人)であるべきだと思われますが、新分科会の構成人数はもっと大規模のこともあります。私の所属する「思想と文化」は、20人超のメンバーからなりますが、それでも全員へ連絡したり、集まったり、議論したりしようとすると、なかなか大変だと感じています。ましてや、大規模な分科会であれば、その困難はいっそう増すはずです。新分科会の他の代表の方々もそうした苦労を味わっているのではないでしょうか。



「健康・スポーツ」
分科会代表
黒川 國児
(教育学部 教授)

新年早々「健康・スポーツC(スキー・スノーボード)」の集中講義を例年より1週間早めて1月7日(日)~10日(水)の3泊4日の日程で実施したが、次年度以降この時期が適切かどうか検討すべき課題となっている。

新年早々のスキー場混雑と危険性、成人式と学生の参加意欲などからこのままでは参加数が減り先細りとなることを危惧している。そこで、指導者も学生も参加しやすい実施時期の設定はなかなか見つ

新分科会代表者の抱負



「心と表象」
分科会代表
松岡 和生
(人文社会学部 教授)

「心と表象」分科会は、心理、言葉、文学、芸術関係の科目群から構成されています。心の世界とその心が表現、表象された世界に関するクリエイティブな学問分野の集まりと、私は理解しています。浮世離れした世界ではありますが、浮き世との接点とか距離感が微妙におもしろくかつ重要な学問群です。今年度、全学共通教育が新しい局面に入ったこの時期、発想の転換とともに、いま一度「ほんとうは何が大切な問題だったのか」を問いつめてみるとまた我々の課題のひとつだろうと考えています。



「現代の諸問題」
分科会代表
今泉 芳邦
(教育学部 教授)

「現代の諸問題」は、日本事情A・B-①、現代社会の社会学-②、キャリアを考える-③の3科目を担当しています。①は、留学生を対象に日本語の習得とともに、日本の歴史・文化・風俗、さらに現代日本の諸問題についても関心を惹起させることに主眼をおいた科目です。②は、地域社会や家族の変容過程について社会学的観点から説明し、受講生が地域・家族問題の解決策を提案できるようになることを目指しています。③は、当面の課題に「就職」をおり、企業の現実、目標管理のあり方など実践的な内容について具体的に論じることを目指しています。



「公共社会」
分科会代表
横山 英信
(人文社会学部 教授)

学生の皆さんからはともすれば軽視されがちな「教養科目」ですが、自分の専門を深めるには、幅広い教養を身につけ、自分なりのものの見方・考え方を培っていくことが必要不可欠です。「高い山ほどそ野は広い」のであり、「教養」というそ野をひろくしてこそ「専門」という山も高くなるのです。学生の皆さんのが興味を持ち、そこから何かを得てくれるような講義を提供できるよう、「公共社会」分科会教員一同頑張っていく所存です。



「生物の世界」
分科会代表
高橋 壽太郎
(農学部 教授)

この分科会は教養科目としての『生物の世界』を担当することになりますが、理科系、文科系を問わず全ての学生に生物学あるいは生命科学を様々な角度から複眼的、鳥瞰的かつ総合的に概説することによって、学生が生命の仕組みを日常生活と関連づけて理解し、いのちのあり方を見つめ、改めて自分を知ることができるような内容にしたいと考えています。



新分科会代表者の抱負



「自然と数理の世界」
分科会代表
西崎 滋
(人文社会科学部 教授)



「環境」
分科会代表
河合 成直
(農学部 教授)

「自然と数理の世界」分科会は、自然科学的な自然認識の到達点を紹介し、自然科学の諸分野、とりわけ、数学・物理学・化学を中心に、それぞれの学問分野に特有な基礎的概念や「ものの見方・考え方」の理解と論理的な思考力の養成を目指して教養科目を準備しています。数学・理科に触れる機会の少なかった学生にとっても、初めて知るよろこび・新しい考え方ふれるよろこびが得られるような授業メニューを提供できればと考えています。他の分科会メンバーのご協力の下に、教養科目の充実を図っていきたいと思います。



「科学技術」
分科会代表
藤代 博之
(工学部 教授)

現代社会の繁栄を担う様々な科学技術開発(例えば、ロボット、コンピュータ、エレクトロニクス、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、新材料など)の歴史と現状、そして将来を、社会や経済との関連も含めて理解し、相互の関わりの中から科学技術の将来のあるべき姿について、自らの考えをまとめることが出来る能力を習得してほしいと思います。講義は工学的な内容が中心ですが、ぜひ工学部以外の学生諸君が幅広い教養を身につける機会にしてほしいと願っています。

「環境」分科会の代表者になりました。この環境科目は4つの学部の先生たちによってすでに開講されています。当面は講義の内容ややり方を必要に応じて改良していくことであると思われます。「環境」というテーマは、現在の社会において重要であり、学生の関心も高いものです。1年生が履修することもあり、出来るだけ学生の勉学意欲を高めるような講義を開講したいと考えています。講義を担当していただける先生方には、よろしくお願ひいたします。



入試部門

入試部門 永野 拓矢

平成18年度の活動報告

4月から入試部門が開設されました。初年度ながら内外に積極的な活動を展開し、学内では入試だけに止まらず企画広報や就職などの各部門と連携を取りながら、岩手大学の入口(入試)と出口(進学・就職)について連携が円滑に行える環境作りに精進しました。また近い将来確実に発生する少子化の影響(=倍率の低下、学力の低下)を最小限に食い止めるべく、その上で「質(学力)量(出願者数)の確保からさらなる飛躍」を目指すために、今後を意識した上で下記4点の活動を行いました。

- ・高校・予備校への積極的なPR訪問
- ・学内説明会の充実
- ・戦略的な広報活動
- ・高校生向けの大学説明会、相談会の実施

高校・予備校訪問

今年度は「岩手大学をまず知っていただく」ことに重点を置き、東北圏内および周辺の高校や予備校へ積極的にPR訪問を行いました。東北を離れても岩手大学への評価は想像以上で訪問の成果を充分に実感した次第です。特に個別試験で東京会場への出願が期待できる関東以西の地域や来年札幌会場を新設する北海道へのPR活動は強化し、1日5~6校のペースで訪問しました。時には生徒を前に即席の出前講義(講演)を行うなど高校側の要望にも応えました。

学内説明会

全学入試委員会や各学部の入試委員会に出席し、最新の受験データを提供しました。

今年のセンター試験は昨年と比べかなり難しくなり、出願校選びは難航した模様です。「現役で国公立大に合格させたい…」高校側のきめ細やかな進

路指導のノウハウなど、出願する側の視点からの説明も加えました。こうした「出願に至るまでのプロセス」が学内に浸透することにより、入試あるいは入試



制度そのものに対する本学の考え方方がより発展的になるものと期待しています。受験生に迎合する必要はありませんが、「(質の高い)受験生が出願しやすい」環境を提供するための方策として、今後も“現代受験事情”を隨時開催していきたいと考えています。

戦略的な広報活動

- ・鉄道車内吊り広告への出稿
- ・「Hi こちら岩手大学」寄稿

本学のポスターを手頃なサイズにまとめ、一部は電車内への車内吊り広告として出展しました。限られた予算の中でのやりくりのため掲載期間も短いものでしたが夏の補習で通学する受験生の目に触れる機会はあったと思われます。“効果検証”は後日、出願時のアンケート調査により分析します。



入試部門



一方で学内機関紙である「Hi こちら岩手大学」において“受験特集”なるコーナーを設け(見開き2ページ)、受験生に「岩手大学合格への道標」を紹介しました。発行日は10月下旬と大学祭の時期に間に合わせたこともあり多数の高校生や保護者に渡ったことと考えられます。「センター試験は(学力だけでなく)時間との戦いです」とあった先輩からのメッセージは今年センター試験が難化して解答の時間が足りなくなった受験生にはかなり応えたことでしょう。

高校生向けの大学説明会、相談会の実施

北東北の3国立大学が主催する「北東北ガイダンスセミナー」が平成18年8月に秋田大学で開催され、入試部門としてパネリスト参加いたしました。「受験指導に望むこと」の題目に対し約15分の発表を行いその後質疑応答を行いました。

一方で新聞社主催の大学相談会や高校からの“出前”授業(出張授業)の依頼などにも対応し、内容によっては進学講演会等も行いました(県立不來方高校、北海道立稚内高校など)。また11月には仙台の予備校から個別相談会の依頼を受け、30名程度の受験生の前で50分間の本学説明も併せて実施しています。

今後の活動について

人文社会科学部AO入試を導入

平成20年度入試(現高2生)から人文学部で本学初のアドミッションオフィス入試(AO入試)を導入します。

入試部門としては入試の企画・運営と1次選考の選考委員に入り(AG=アドミッショングループ。グループ長はUECセンター長の玉理事)毎月AGと学部ワーキング・グループの会議を開き9月の入試準備を行っています。

AO入試は既に全国立大の4割に相当する30以上の大学が実施しています。本学人文社会科学部が来年度入試より開設し、「学力だけでなく(なくては困りますが)、別の面で際立った才能を持ち合わせて、かつコミュニケーション能力のある」人材を求めていきます。定員はわずか9名ですが、この選ばれたメンバーから将来岩手だけではなく全国、全世界で活躍する人材を輩出していきたいと考えています。

大学単独説明会の実施

岩手県内の3会場(盛岡、北上、釜石)、および本県と隣接する3会場(青森、八戸、仙台)にて、本学単独の説明会を企画しています。推薦やAO入試など、直接受験生に「じっくりと…」伝えたい項目や、就職支援など本学が近年努力を重ねて大きな成果を出しながら、意外なほど学外に伝わっていない「もったいなさ」を解消するため(出願時のアンケート調査から)に単独での説明会を選択しました。地元では「第1志望」の学生をより多く、そして県外では「岩手大も結構いいぞ、と思って受験した」学生を増やすためにも今後広報活動にも一層の力を入れていきたいと考えています。

全学共通教育企画・実施部門

全学共通教育企画・実施部門 山崎 憲治

平成18年度の活動報告と課題

新分科会結成

全学共通教育の充実が、魅力ある大学教育の実現の柱の一つであることはまちがいないことです。しかし、だれが、どのようにこの教育を担うかに関して、多様な方法が考えられます。岩手大学では分科会を充実、発展する中から、この課題への解を求めようとした。バラエティに富む科目を立ち上げる基礎として、すべての教員がいずれかの分科会に所属し、全学共通教育にかかわりをもつことを条件整備の出発点としました。

2005年12月28日の大学教育総合センター運営委員会で、全教員が全学共通教育に関わることや、新分科会の結成が決定されました。その後は、新分科会仮登録、本登録を経て、全教員のご協力を頂き、2006年9月には新分科会が立ち上がりました。

分科会の役割と機能

ここでは今一度、全学共通教育の充実という原点を確認しておきたいと思います。全教員がいずれかの分科会に属し、全学共通教育にかかわりを持つという出発点に立っています。新分科会は全学共通教育科目を立ち上げる母体になります。豊かな全学共通教育を学生に付与することは、大学に籍を置く教員の役割でもあります。ご多忙の先生にあっては、他学部の学生を教える機会は、学生が在籍する四年に一度しか作れないかもしれません。学生は、多様で豊かな全学共通教育を求めていることは確かです。新たな科目を立ち上げる機能と役割を新分科会は持っています。

新分科会は、全学共通教育を進める実践的な組織です。全学共通教育にかかわって、連絡・調整をはかるばかりか、時には教育実践力を高めあう場(FD活動の充実)になることもあります。土俵は全学共通教育ですから、ご自身の専門分野に必ずしも一致する必要はないと考えております。学生とともに学ぶという視点で新たな分野や切り口に挑戦することも大切なことと考えております。2つ以上の分科会に

所属されている先生もおられます。専門教育と全学共通教育を単純な発展基礎の関係におくことが、必ずしも優れた大学教育の実践につながるとはいえないと思います。勿論専門の豊かさを否定するものではありません。同時に、課題探求能力を培うには、新しい視点や広い視座が必要であることは間違ひありません。

分科会は全学共通教育の教育実践力を高めあう機能を担うものです。連絡・調整機能が可能で、教員相互の意思疎通を図りやすい組織です。組織を活性化するには、適正規模の員数が必要と思われます。今回の分科会結成では、一つを除いて30名規模の構成員の分科会になりました。今後は、分科会の中でオムニバス方式の授業を組む企画も生まれるでしょう。ほかの先生がどんな授業を展開されているか、ちょっとのぞきたくなる、そんな関係が分科会から生まれてくることを期待しております。

新分科会と岩手大学の全学共通教育

新分科会は岩手大学の全学共通教育に新たな息吹を吹き込み、新しい芽を育てるものです。

ESD(Education for Sustainable Development:「持続可能な開発のための教育」)で挙げられている課題は、濃淡はありながらすべての分科会に含まれております。現代社会が直面する課題でありながら、日本のどの大学も「持続可能な開発のための教育」を旗印に挙げた例はありません。パイオニアの地位を占めることができます。

岩手の‘大地’と‘人’と共に生きる大学にふさわしい旗印と考えております。全学共通教育を通して、ESDマインドの芽が育ち、大学生活全体を通して大きく成長する、その契機を新分科会が用意すると位置づけていただければ幸いです。一方、「知財教育」のほうも、全学共通教育から学士課程全体にわたり、知財教育を実施している唯一の大学でもあります。新しい科目を立ち上げる一方で、新機軸を提示しそれがFD活動等でそれぞれの科目にプラスの影響を与える。この具体化が問われているように思えます。

全学共通教育企画・実施部門

基礎ゼミナールの発足

19年度から新入生を対象に、必修科目「基礎ゼミナール」が始まります。この科目的立ち上げは、共通教育充実の上で大きなステップになると想っています。このゼミナールは、転換教育として実施されます。

全学共通教育の三本柱が立ち上がったことになります。共通基礎科目、教養科目、そして転換教育科目です。

岩手大学では基礎ゼミナールの原型とも言う学習は行われていました。人文社会科学部の基礎ゼミ、教育学部の初期ゼミ、工学部情報でも1年生を対象にしたゼミナール方式の授業がもたれていました。今回はこれらを、全学共通教育の必修科目として展開できることに意義があります。

一つは、全学共通教育の全教員体制が確立したことと関わります。基礎ゼミナールは全学共通教育科目として位置づけられました。二番目として新入生を対象に20名以下の少人数で、教師や仲間との対話や発表を通して学ぶこと。三番目の特色はア



カデミックスキルやソーシャルスキルの獲得を目指す学習の場と考えました。ワーキンググループが作られ、具体的な内容や課題を論じ、2006年12月18日には全学に向けた説明会を行いました。

大学のユニバーサル段階を迎える、このような学習の場が、学内的にも社会的にも強く求められてきました。高校を卒業したての学生にとって、新入生生活は不安の連続から始まると思います。一人で生活する学生も少なくないわけですから、ごみの捨て方まで新しい秩序と写ることもありうるわけです。いやおうなしに社会の中に生きるわたくしを実感し、成長することが強く求められています。

転換教育科目の教育目標

転換教育科目は、全学共通教育へのイントロダクション、専門教育へのイントロダクション、そして大学生活へのイントロダクションの三つを役割とする科目です。

大学での学びにおいては、高等学校までの学習とはかなり異なった問い合わせがされます。正解のない問い合わせや、問い合わせのものを自分で作らねばならないこともあります。創造性や批判する力が問われますし、多数の価値観に接する中から学ぶことも必要となります。転換教育科目は、こうした大学での学びについて、少人数のクラスで学生が互いに学び合うことを目指しています。また、大学での学びを社会生活への第一歩と意識して、そこでルールやモラルも合わせて学ぶことも目標の1つです。参考資料として、現在作成中の大学における「学び」のはじめには、全学共通教育部分の展開に参考となる題材をのせようとしています。主な項目を挙げてみます。

- ◆ 卷頭言
- ◆ 岩手大学の教育理念と教育目標
- ◆ 授業とは
- ◆ ノートの取り方
- ◆ レポートの書き方(文系)
- ◆ 人権とハラスメント
- ◆ フィールドワークから学ぶ
- ◆ 実験から学ぶ
- ◆ 実験レポートの書き方
- ◆ プレゼンテーションの手法
- ◆ How to Prepare for a Presentation in a Second Language
- ◆ まず読書を!
- ◆ 自主的学習の積極的意義
- ◆ ESDへの道
- ◆ 新聞を読む習慣を作ろう
- ◆ 図書館に行ってみよう
- ◆ 健康管理と食事・運動
- ◆ 健康診断・健康相談
- ◆ キャリアを考える

全学共通教育企画・実施部門

理系基礎学習支援講座

1) 支援講座の必要性

本年の教育界をゆるがせた問題の一つに未履修問題があります。俎上に上ったのは地歴、公民でしたが、理科・数学でも同様のことが起こりうる状況にあります。履修の機会を与えられなかった学生は確実に存在します。一方、理科離れという課題の中で、理科を暗記科目・内容として位置づけ、暗記に汲々とする高校生の学習スタイルは、大学での学習でも連続して見られてるのではないか？

理系基礎の学習支援講座を始めるにあたり、多くの先生にビラを配布していただき、また、ポスターを各所にはらせてもらいました。そこには、“この講座は「数学」「物理」「化学」の分からぬところを高校の先生がやさしく、しっかりとサポートしてくれます。理系基礎をもう一度自分で学びたい方は、ぜひ気楽に参加してください。単位にはなりませんが、自分で学ぶ自信になります”という呼びかけが書かれていました。

2) 基礎の充実を図る取り組みから、見えてきたもの

基礎学習に立ち返り、学生が自から学び、相互に学びあう関係を確立する中から、確かな基礎学力をつけようとするものであります。半年間「理系基礎の学習支援講座」を進めてきて、大学教育が抱える大きな課題が見えてきました。

- ①選択制が大幅に取り入れられた高等学校の現行学習指導要領に対応した大学教育の実現ができているか。
- ②現行の学習指導要領では学習課題・内容の精選を図った。これに対応して大学の専門基礎教育科目で学習内容の精選が展開したか、あるいは大学の教員がその実際を前提にした授業展開をしているか。
- ③所謂「ユニバーサル」段階にある、学生の学ぶ意欲・態度の検討をしてみる。基礎学力を造る講座で、自学・自習の風潮を確立することは可能であろうか。

3) 理系基礎講座の実際

理系基礎学習支援講座は杜陵高校の現場の教諭に指導を頼った。これは、高大連携の一環という位置づけと共に、何とか基礎力を岩手大学の学生に自

主的につけることを目的としました。毎週、数学、化学、物理それぞれ1回づつの授業を行い、基礎力を持つ支援をしようというものでした。授業展開とともに、研究会活動も進めました。12月には研究会を前述の教諭3名と本校の教員10名で行ない、中間的総括と課題の洗い直しを行いました。

杜陵高校教員からの実践報告

第一回目の及川先生(物理)の授業には、20名の学生が参加しました。自分で学習しない限り理解是不可能だ。問題演習を行ってきて、質問に答えるという方法をとりました。同時に物理未履修者には、基礎の基礎からの学習が必要になるが、授業時間の後半には一斉授業方式で進めています。第2回以降、受講する学生の数は6～8名で安定しており、このくらいの人数のほうが個別指導には適正規模と考えています。星川先生(化学)からは、当初から8名前後の参加者であった。この人数はやりやすい。化学をまったく履修していない学生までいるから、毎回難易度を3段階にわけて、さらに各段階ごとの問題を作成し、小プリントを作成しているという発言がありました。江端先生(数学)からは、大学入試問題レベルを想定したが、基礎からやり直す必要がある学生や、大学の学習にちょっとつまづいている学生まで、多様な学生に少々面食らっているとの発言があり、実際には学生と一緒に問題演習をすることで、身近で何でも質問ができる教育を目指していることが述べられた。

今後の課題

今回進めた支援講座は「学習課題に対する支援」という役割で円環を閉じています。しかしこの課題は、専門基礎とどう有機的に結びつけるかという点です。「分からぬ学生は基礎講座にいってこい！」では主体的学習に向かうまでに時間がかかります。大学教育の基礎・基本に関する教材開発を進めること、多様な学生のニーズに合った学習の場を用意し、ターゲットを絞込むこと、基礎・基本の教材開発はリニューアルを続けることで、学生の学力に適応したもののが徐々に造られていくと考えています。（研究会活動：2006年12月13日）。

全学共通教育企画・実施部門

2006 ウィンターセッション

2006年8月2日盛岡第一高等学校で、平成18年度第一回高大連携推進会議が開かれました。ここで、本年度のウィンターセッションが12月25日(月)～27日(水)の日程で実施されることが報告・決定されました。ウィンターセッションは高大連携事業の中核的取り組みであり、県内各地の高校生が国立岩手山青少年交流の家に宿泊し、県内の5大学で大学の先生による講義を受ける企画です。すでに3回実施されていますが、昨年は44高校から292名の高校生の参加がありました。

岩手大学では昨年まで各学部が実施主体となり、持ち回りで、この事業を行ってきましたが、全学部一巡したため、今年は新しい企画と実施体制でとりくみました。参加者は高校1年生、2年生であり、進路希望が十分に固まっていない段階の生徒が大半です。昨年は農・工学部共同主催であったため、理系の講義を主としていました。そのためアンケートには文系の講義を求めるものも多数見られました。今回は、受講高校生のニーズにこたえ、文系理系を問わず、各学部から2名、計8名の講師をお願いし、岩手大学のウィンターセッションを組み立てました。高校生が学習の意欲を高め、興味と関心を寄せ、結果として岩手大学を目指す生徒に成長する契機になることを願うセッションを実現するため、各学部の特色と高校生が興味をわかす講義を依頼し、広い視点から学習が展開できることを進めました。

本年度岩手大学のセッションに参加した高校生は108名、教室等の物理的条件で受け入れ可能限界の数です。下記の表は参加者の概要を示しています。

志望学部	女	男	1年	2年	計
人社	14	17	5	26	31
教育	25	14	12	27	39
工学	3	22	6	19	25
農学	9	3	2	10	12
不明			1		1
計	51	56	26	82	108

高校1年生に将来の志望学部を聞くことは無理な質問であります。興味と関心を持つ分野というレベルでとらえています。人文社会に志望していたが、農学の話題に興味と関心を寄せた生徒もある

学 部	学科・課程	氏 名	講義主題
人文社会科学部	国際文化課程	長野 俊一	ことばの織物(文学テクスト)をいかに解きほぐすか
人文社会科学部	法学・経済課程	内田 浩	法律を学ぶ意義～日常生活における「法的なものの考え方(Legal mind)」の重要性
教育学部	国語教育	中村 一基	死後の環境論～葬送と墓のゆくえ～
教育学部	社会科教育	宇佐美 公生	環境についての考え方－日本とドイツを比較して－
工学部	フロンティア材料機能工学専攻	成田 榮一	環境を守る化学の世界－水の汚染と浄化－
工学部	フロンティア材料機能工学専攻	中澤 廣	県境の廃棄物不法投棄現場の原状回復に向けての大学の取組
農学部	獣医学科	居在家 義昭	輝る豚－発生工学の歩み－
農学部	獣医学科	谷 健二	犬猫の病気－脳と脊髄－

いは理系の生徒が人文系に興味を見出した例も幾つか見られるわけですから、この数値が特定の意味を持つものではありません。むしろ、高校1年生に興味と関心を引き起こさせることができたか、その方向を持つことができたかが、問われる課題でありました。大半の生徒がこの点で満足していると感想をのべているので、試みは大いに前進したと思えます。高校生のアンケート・感想を集計中ですが、次の3点を指摘できます。大学で学んだという「経験」である種の「達成感」を得ている点。初めての経験である90分授業、しかもこれが8コマ3日にわたって展開されたわけですから、これを何とか聞き終えたという「達成感」が生まれることも自然です。自らの「進路」に確信を得た点。希望する学部の講義を受け、みずからの進路の方向を確実にすることが出来た生徒。憧れにむかって確実な一步を踏み出す契機を作っています。

「学び」の多様性・発展性に気づいた点。日常の授業ではなかなか気づくことが出来なかつた「学び」を、少し広い視点や専門の豊かさから学ぶことになりました。この発見は高校にもどったとき、授業への参加を深める要素になることが期待できる生徒も多く見られています。

教育評価・改善部門

教育評価・改善部門 江本 理恵

*教育目標の整備・成績評価基準のガイドライン

平成18年度年度計画の項目、

- ・教育目標の徹底とそれに基づいた履修目標による成績評価基準を作成し、成績評価の一貫性を実現する。
- ・授業科目区分毎の成績評価結果のバランスに配慮した成績評価基準を作成し、適切かつ有効な成績評価基準を実施する。

の達成に向け、各学部、分科会における教育目標、成績評価基準のガイドラインを作成することは、教育評価・改善部門に課せられた大きな課題でした。部門では、平成17年11月頃よりこの議論を開始し、平成18年7月には分科会へ、11月には各学部へ、「教育目標等の整備と成績評価基準のガイドライン作成について」の依頼を出すことができました。

その過程において、「成績評価は到達目標の達成度に基づいた絶対評価を基本とする」「教育目標に沿った授業の目的の設定、到達目標の明確化を行う」「到達目標に沿った成績評価の方法と基準を設定することなどが議論され、合意されていきました。

依頼は出しましたが、「教育目標」や「成績評価基準のガイドライン」は一朝一夕に作成できるものではないと考えています。これをきっかけに、分科会や学部等で議論が行われることを期待しています。

表1：研修プログラム

プログラムI	テーマ	高等教育機関として岩手大学に求められているニーズと課題
	テーマ	解決に向けてどのような取組を行えばよいか
プログラムII	実施方法	プログラムごとに班単位で議論・意見をまとめ、全体で発表、議論する。議論後、プログラムI・IIをまとめて「提案書」を作成。
	実施方法	玉センター長からの問題提起に基づき、全体で議論。
自由討議	テーマ	全学共通教育改革実施案について
	実施方法	玉センター長からの問題提起に基づき、全体で議論。
プログラムIII	テーマ	全学共通教育の充実にどう取り組むか
	テーマ	大学院教育の充実にどう取り組むか
プログラムIV	実施方法	プログラムごとに班単位で議論・意見をまとめ、全体で発表、議論する。議論後、プログラムIII・IVをまとめて「提案書」を作成。

表2：参加者アンケート（一部）

Q. 今回の研修会について、どのような意識で参加されましたか？

積極的	やや積極的	やや消極的	消極的
5	12	12	2
(人)			

Q. 結果的に、今回の研修会に参加して良かったと思いますか？

良かった	まあまあ良かった	あまり良くなかった	良くなかった
12	18	1	0
(人)			

*平成18年度FD合宿研修会

平成18年8月31日、9月1日に、八幡平市にある「自然休養村 なかやま荘」にて、FD合宿研修会を開催しました。今回は4月に大学教育総合センターが総合化したことを受け、テーマは「大学教育の組織化と総合化を考える」、参加者は各部門の兼務教員、職員を中心とした参加者40名、スタッフ7名で実施しました。プログラムは4つ(表1)で、参加者はそれぞれ班に分かれ、ワークショップ形式で各課題に取り組みました。

今年度は実施場所を変えたこともあり、不手際でご迷惑をおかけした点もありましたが、参加された方々の温かいご支援の下、無事に研修を終えることができました。来年度は、具体的な授業設計手法や授業実施方法について意見を交換できるプログラムを取り入れられないかと計画中です。



教育評価・改善部門

*全学共通教育授業公開

教育評価・改善部門では、前期・後期のそれぞれ1週間を「全学共通教育授業公開週間」として、教職員、一般市民を対象に全学共通教育科目の全授業科目を公開する試みを行っています。今年度は、新たに保護者を対象とした「授業モニター制度」を導入し、前期5名、後期3名の保護者にモニターになっていただきました。モニターや一般の参観者からのご意見は示唆に富むものが多く、今後の授業改善の指針としたいと思います。

この授業効果は、平日ということもあり、なかなか参観者を増やすことができません。地域に開かれた大学として、また、外部からの意見をいただける貴重な機会として、今後も様々な工夫しながら続けていきたいと考えています。

【モニターからのご意見（一部抜粋）】

- ・若い現役学生だった頃にはピンとこなかったことでも、今、年齢を重ねて経験値が増えたことによりすんなりと入ってくるような気がします。
- ・総合大学に足を踏み入れたのははじめてですが、多様性にふれることができうれしく思います。

*入学前教育（プレ・アイアシスタント）

今年度より、推薦入試等で入学が決まった高校生を対象とした入学前教育に取り組んでいます。今年度の課題は課題図書を指定した「読書リポートの作成」です。

この入学前教育の実施にあたって最も難しい「生徒とのコミュニケーション」を図るため、プレ・アイアシスタントというサイトを開発し、運用しています。現在（2月28日）、対象者237名中170名がこのサイトにログインしています。また、郵送もあわせて、約150通の「読書リポート」が提出されました。

1月後半からは千歳科学技術大学が提供しているe-Learningサイトと



プレ・アイアシスタント学生用トップページ

の連携を図り、現時点（2月28日現在）で83名の学生がアクセスし、平均243分（最大1890分）の学習を行っています。

*研究会・講習会

昨年度の反省をふまえ、今年度は講演会、講習会、研究会等を積極的に開催しました。今の学内状況では、みんなが参加できる日時の設定が難しく、多くの方に参加してもらうことはできませんでしたが、その分、密度の濃い議論ができたことはプラスでした。

今年度「東北地区大学教育支援施設等交流会議」を立ち上げたこともあり、来年度は東北地区の大学同士の「教育」の交流をさらに推し進めていくことを計画しています。

平成18年度実施記録

* FD講演会

平成18年7月14日（金）

「FDの開発と実践：山形大学編」

山形大学高等教育研究企画センター教授 小田隆治

* FD研究会

平成18年9月11日（月）

「単位制度について考える」

弘前大学21世紀教育センター教授

土持ゲーリー法一

* FD研究会

平成18年12月18日（月）

「理系基礎教育の実践とe-Learningの活用」

～千歳科学技術大学の事例から～

千歳科学技術大学光科学部助教授 小松川 浩

* IT・FD講習会

担当：教育評価・改善部門 福永良浩

平成18年4月26日（水）・11月24日（金）

「授業に役立つパワーポイントの使い方」

平成18年5月24日（水）・12月20日（水）

「授業に役立つ動的なパワーポイント教材の作成」

平成18年6月29日（木）・平成19年1月31日（水）

「授業に役立つパワーポイント教材の各機能」

平成18年7月25日（火）・平成19年2月（予定）

「ワードを活用したポスターの作成」

平成18年8月29日（木）・平成19年3月（予定）

「エクセルを活用したデータ集計」

教育評価・改善部門

*平成 18 年度授業アンケート & 優秀授業表彰式

今年も前期・後期と全学共通教育授業アンケートを実施しました。前期のアンケート実施率（アンケート実施授業科目数 / 開講科目数）は約 99%、これは大変誇れる数字です。ありがとうございました。先生方のご希望（履修人数の調整、教室サイズ、設備等）をなかなか反映できない状態でのアンケートで、心苦しい点もありますが、今後とも、ご協力をお願いいたします。

また、平成 17 年度後期の優秀授業表彰式（平成 18 年 7 月 18 日実施）より、この表彰式を、形式的な表彰状授与の場から、軽食を囲んだ受賞者と学長や理事などとの懇談の場としました。日常、教員同士の懇談の場が少ないこともあります、授業改善への情報交換の場となることを期待しています。



平成 17 年度後期 学生による授業アンケートに基づく 全学共通教育科目優秀授業一覧

【人間と文化】(23 科目)

欧米の文学	長野 俊一
適応の理解	佐藤 正恵
心の科学	阿久津 洋巳
心の科学	松岡 和生

【人間と社会】(18 科目)

社会的人間論	塚本 善弘
憲法	内田 浩
対人関係の心理学	堀毛 一也

【人間と自然】(18 科目)

生命のしくみ	牧 陽之助
自然と法則	八木 一正

【総合科目】(5 科目)

現代職業選択論	田口 典男
---------	-------

【環境教育科目】(8 科目)

「環境」を考える	吉田 勝一
「環境」を考える	牧 陽之助

【外国語科目 (英語)】(64 科目)

英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 B	SHORT KEVIN ANTHONY
英語 B	SHORT KEVIN ANTHONY
英語 B	ISHIKAWA PEGGY MARRIE
英語 A	工藤 裕子
英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 B	AHDAR ELVIS
英語 B	AHDAR ELVIS
英語 B	AHDAR ELVIS
英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 A	長野 とも子

【外国語科目 (英語以外の外国語)】(48 科目)

中級フランス語	横井 雅明
初級中国語 (発展)	吉野 寧恵
初級韓国語 (発展)	崔在繕
中級ロシア語	笹尾道子
初級フランス語 (発展)	加藤 祐子
初級フランス語 (発展)	加藤 隆
初級フランス語 (発展)	加藤 隆
中級韓国語	楊政亜
初級ドイツ語 (発展)	能登 恵一

【健康・スポーツ科目】(34 種目)

トレーニング	澤村省逸
体力づくり	大賀圭造
ラケットスポーツ	吉田 実
ゴルフ	石井 旨岡
体力づくり	佐々木 優次
ニュースポーツ	小笠原 義文
サッカー	佐々木 博之
バレーボール	伊藤 齊訓
バドミントン	大久保 香織
バドミントン	大久保 香織

【情報科目】(5 科目)

情報基礎	塚野 弘明
------	-------

*授業科目区分の横の()内の数字は、アンケート実施科目数です。

*授業科目単位で選出しているため、複数の授業科目で同じ教員が受賞することもあります。

教育評価・改善部門

平成 18 年度前期 学生による授業アンケートに基づく 全学共通教育科目優秀授業一覧

【人間と文化】(24 科目)

倫理学の世界	小林 瞳
欧米の文学	長野 俊一
適応の理解	早坂 浩志

【人間と社会】(27 科目)

現代社会と経済	田口 典男
憲法	宮本 ともみ
現代社会の社会学	塚本 善弘
経済のしくみ	杭田 俊之

【人間と自然】(16 科目)

物質の世界	吉澤 正人
-------	-------

【外国語科目（英語）】(66 科目)

中級英語	小林 葉子
英語 B	LOWELL SAYERS
英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 B	RYAN THOMAS MILLER
英語 A	寒河江 正行
英語 B	LOWELL SAYERS
英語 B	ISHIKAWA PEGGY MARRIE
中級英語	OGAWA ERIK NIKOLAI
英語 B	SEAN P. MARSULA
英語 A	三浦 黙夫
英語 B	RYAN THOMAS MILLER
英語 A	伊東 栄志郎

【外国語科目（英語以外の外国語）】(49 科目)

上級日本語 A	松岡 洋子
初級フランス語（入門）	加藤 祐子
初級中国語（入門）	中安 美恵子
初級フランス語（入門）	加藤 祐子
初級フランス語（入門）	加藤 隆
初級中国語（入門）	崔華月
初級中国語（入門）	劉文静
初級ドイツ語（入門）	大友展也
初級フランス語（入門）	加藤 隆

【健康・スポーツ科目】(40 種目)

ゴルフ	石井 旨岡
体力トレーニング	佐々木 優次
バレーボール	小笠原 義文
ソフトボール	佐々木 優次
サッカー	大賀 圭造
体力トレーニング	佐々木 優次
バドミントン	武田 正司

【情報科目】(17 科目)

情報基礎	中西 貴裕
情報基礎	五味 壮平
情報基礎	福永 良浩

* 授業科目区分の横の()内の数字は、アンケート実施科目数です。

* 授業科目単位で選出しているため、複数の授業科目で同じ教員が受賞することもあります。

* 平成 18 年度の選出基準は、17 年度の選出基準より一部変更されました。センターの年次報告書にて報告します。



平成 18 年 7 月 18 日
平成 17 年度後期優秀授業表彰状授与式にて



平成 18 年 12 月 1 日
平成 18 年度前期優秀授業表彰状授与式にて

岩手大学全学共通教育の概要(改訂)

理 念

岩手大学は、各学部が行う専門教育とならんで、所属する学部にかかわらず全学生が共通に受けるべき教育として全学共通教育を設け、「基礎的な知識の習得を求め、多様な領域に対する学問的関心を喚起するとともに、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」ことをその理念としています。この理念を実現するために、全学共通教育は岩手大学の全ての教職員の关心・責任・協力のもとに実施されています。

教育目標

全学共通教育科目は、「転換教育科目」、「共通基礎科目」及び「教養科目」によって構成され、それぞれの教育目標を設定して全学共通教育の理念の具体化を図っています。また、この三つの区分の下に、それぞれに対応する授業科目群を設けて、より具体的な教育目標を明示しています。

さらに、教育目標の達成に当たっては、国連「持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development: ESD)の10年」^(注)を共通に意識することに努めています。

(注)2002年にヨハネスブルク(南アフリカ共和国)で開催された「持続可能な開発のための世界首脳会議」(ヨハネスブルク・サミット)で日本が提案して決議に盛り込まれ、同年の国連総会においても日本の提案で採択されて、2005年から開始されている世界的な教育キャンペーン。

1. 転換教育科目の教育目標

転換教育科目は、全学共通教育へのイントロダクション、専門教育へのイントロダクション、そして大学生活へのイントロダクションの三つを役割とする科目です。転換教育科目は、大学での新たな学びについて、少人数のクラスで学生が互いに学び合うことを目指しています。また、大学での学びを社会生活への第一歩と意識して、そこでルールやモラルも合わせて学ぶことも目標の1つです。

2. 共通基礎科目の教育目標

共通基礎科目は、学生が在学中に教養科目と専門教育科目の学業を進めるうえで、また卒業後の社会生活を進めるうえで共通に必要な基本的技能やその基礎となる知識を全学生に習得させることを教育目標とする科目です。授業科目は、「外国語科目」、「健康スポーツ科目」および「情報科目」に区分されます。

3. 教養科目の教育目標

教養科目の教育目標は、特に上記の全学共通教育の理念における「幅広い教養」、「深い教養」及び「総合的な判断力」という3項目に基づいて、次のように設定されています。

- ①さまざまな学問分野の「ものの見方・考え方」や知識を幅広く習得することにより、自分自身の専門分野の仕事の全体的な意味や役割を知り、その専門的な知識を生かすことのできるよう幅広い教養を自ら培うことへの教育的支援。
- ②あらゆる分野の日常生活の営みの基盤になっている各種の常識・通念を根底的に深く問い合わせ直すことができるという意味での、深い「ものの見方・考え方」や知識を習得することにより、自然との関係においても人間との関係においても、創造的・個性的に生きるうえで必要な深い教養を自ら培うことへの教育的支援。
- ③多角的な「ものの見方・考え方」や学際的な知識を習得することにより、激しく変動する現代社会の複雑な諸問題に柔軟に対応できるような総合的な判断力を自ら培うことへの教育的支援。

以上のような教育目標の達成をめざす教養科目は、主題別に「人間と文化」、「人間と社会」、「人間と自然」、「総合科目」、「高年次課題科目」及び「環境教育科目」に区分されます。

専門教育関係連絡調整部門

専門教育関係連絡調整部門長 玉 真之介

平成18年度の活動報告と課題

18年度課題の達成

昨年度のエルディオ4では、この部門の平成18年度の課題として以下の項目を上げていました。①会議の定期開催、②22単位履修上限の見直し、③「秀」の導入、④国際交流科目の全学部での単位認定、⑤厳格な授業評価のためのガイドライン作成。以上、5項目です。

まず、会議の定期開催は、部門会議の月1回の定例化によって、今年度は9回の開催となりました(平成17年度は2回)。②22単位履修上限については、24単位へ緩和する案を各学部で検討していただきて、平成19年度から全学年一斉に適用することを決めました。③「秀」については、導入案を本部門会議から各学部の教務(学務)委員会に諮り、それを踏まえて平成19年度入学生から導入を決めました。④国際交流科目については、各学部の自由単位として受講できるように決めました。⑤厳格な授業評価のためのガイドラインについては、評価・改善部門で作成した指針を参考として、本部門から各学部で検討していただきました。

以上のように、兼務教員のご協力もあって、年度当初に掲げた課題はすべて達成することができました。

19年度の課題：専門基礎教育の全学的体制

今年度、本部門の重要課題として浮き上がってきたのが専門基礎教育です。平成12年度の全学改組にともない専門基礎教育は、全学共通教育から専門教育へと位置づけが変わりました。それに合わせて人文社会科学部から工学部・農学部へ各2名、合計4名の教員の移動が行われました。しかし、基礎教育を担当していた教員が学部を移動したわけではなく、あくまで教員定数の移動でした。

農学部で言うと、この2名は工学部の福祉システム工学科の新設に全学的見地に立って2名を出す見

返りであり、人数に増減はありません。工学部も他学部からの増員は主に学科新設に当たられているため、専門基礎担当教員が増えたという実感がありません。一方で、人文社会科学部では、定年退職の不補充により移動定員を削減するため、年を追うごとに専門基礎教育の担当者は減っていきます。

この結果、専門基礎教育の担当者が工学部・農学部では増えない状況のまま、人文社会科学部の担当者が減っていくという事態が進行し、非常勤講師にも頼れない環境の下で、専門基礎科目の開講が難しくなっています。

それに加えて、平成18年度から新学習指導要領で教育を受けてきた学生が入学してきました。高校までの授業内容は3割削減され、しかも理科は選択となって、物理を選択する学生は2割以下と言われています。これが工学部進学者の減少だけでなく、基礎学力の低下の原因となっています。

担当教員の減少と基礎学力の低下、このダブルパンチに打ち克つ方策が必要となっています。学士課程については、基礎を中心とする方針が中期目標・計画に書かれています。しかし、基礎の学習に対する学生のモチベーションは低く、補習を行うとしても非常勤講師も増やせません。この困難な課題への挑戦が平成19年度の課題です。



学生生活支援部門

学生生活支援部門長 玉 真之介
学生支援課長 菊地 壮

平成18年度の活動報告と課題

授業料免除基準の見直し

今年度の学生生活支援部門で重要な議題となつたのは、授業料免除基準の改定でした。法人化を契機に、それまでの全額免除基準ではなく、半額免除基準を使ってより多くの学生の授業料免除対象者とする方針に切り替えました。その趣旨は最初の年は実現したのですが、結果として授業料免除申請者が平成16年度の600人台から平成17年度は800人台、平成18年度には900人台にまで大幅に増え、免除予算を1,500万円増額しても100人以上の適格者が免除されないという事態となりました。

これを受け、来年度からは、まず全額免除基準で順位を決め、免除予算にあまりが出たときは、半額免除基準の上位者を免除する这种方式に改正しました。また、上位約100名程度を全額免除とし、それ以下を半額免除とする平成17年度に決定した方針は引き継ぐこととしました。

学生議会との懇談会

2年目を迎えた学生議会は、6月と11月に通常議会を開催し、そこで学生の要望をとりまとめて大学へ提出するという活動を定着させました。要望については、学生支援部門の兼務教員が学生議会代表者と懇談を持つことも定例化しました。前期では、意見書箱に投函された意見の羅列だった昨年を反省して、学生議会でその意見に対するアンケート調査を行い、その結果も提出されました。後期は、学生議会の場で、グループに分かれて要望を出すかどうかの議論を行い、それを踏まえて要望を絞って提出するようになりました。



学長と学生との懇談会

学生の利益代表として徐々にですが進化しつつあります。学生生活支援部門としても、もっともな要望をできるだけ実現するように努力するだけでなく、学生に助言を与えるスタンスで懇談会に望んでいます。

レツツびぎんプロジェクト

今年度は、地域活動に加えて、学内外の環境問題という応募のジャンルを作りました。11件の応募があり、1件が不採択、1件が辞退で、合計9件が選ばれ、取組を行っています。3月7日が発表会となります。今年はその中からベストと準ベストを選考し、その2つには入学式の後のオリエンテーションにおいて、新入生向けにプレゼンテーションをしてもらいました。新入生にレツツびぎんプロジェクトに興味と関心を持ってもらい、応募してもらうことを目指します。



Let'sビギン交付式



ガンチョンタイム第6回

学生生活支援部門



図書館サポートーズ研修会



学生表彰

がんちゃん奨学資金の貸与

昨年度は1件のみであったがんちゃん奨学資金が、今年度は10件にまで増えました。それを通じて、生活に困窮する学生の姿が見えてきます。また、親に心配をかけたくないという思いや、親から仕送り無しでアルバイトだけで頑張っている学生もいることもわかつてきました。

がんちゃん奨学資金には、各学部の後援会からだけでなく、岩大生協からも昨年50万円、本年50万円の資金援助をしてもらっています。

クラス担任教員ハンドブックの作成

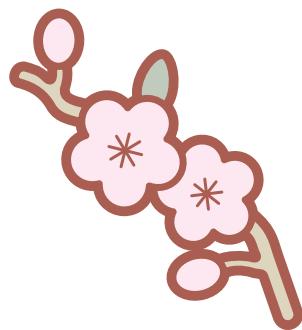
休学退学がなかなか減らない現状が続いています。この改善のためには、学生相談などのクラス担任の先生による指導によるところが大です。そこで、学生生活支援部門では、「クラス担任教員による学生指導のためのガイドライン」を「クラス担任教員ハンドブック」に改訂し、これまで以上にクラス担任の仕事をわかりやすく示すと共に、学生相談などの場合に活用しやすいものにしました。また、相談記録と休退学学生へのアンケート調査を新たに加えました。

とりわけ、新入生のクラス担任の先生は、目を通していただいて、活用していただきたいと思います。

今後の課題

来年度は、学生の懲戒に関する全学的体制を考案したいと考えています。現在、カンニングだけは全学的な基準がありますが、その他は全て学部の学生委員会に委ねられています。その結果、処分に時間がかかり、学部間で差が出る可能性もあります。処分の原案は全学統一で学生生活支援部門が中心となって作成し、それを各学部教授会で審議していくだけ方に切り替えることを検討します。

また、確実に1年卒業が遅れる現在のカンニングに対する処分も、むしろ指導に時間をかけるようにして、機械的に卒業が遅れることがないような方式への変更を検討します。



就職支援部門

就職支援部門長 玉 真之介
就職支援課長 後藤 周悦

平成18年度の活動報告と課題

就職戦線の変化

前年度から企業の求人活動は活発化の兆しが見えていましたが、18年度にはその傾向がはっきりと現れました。企業の求人担当者が大学を訪問する機会が増え、求人活動も例年より早くスタートしました。これは、1つには首都圏を中心に景気回復が進んでいることの反映であると共に、いわゆる団塊世代の大量退職を前に、企業が人材の確保に向かっているからと思われます。18年度の1月末時点での就職内定状況は、以下の表のようになっており、昨年に続き教育学部の大きな落ち込みが深刻な問題です。

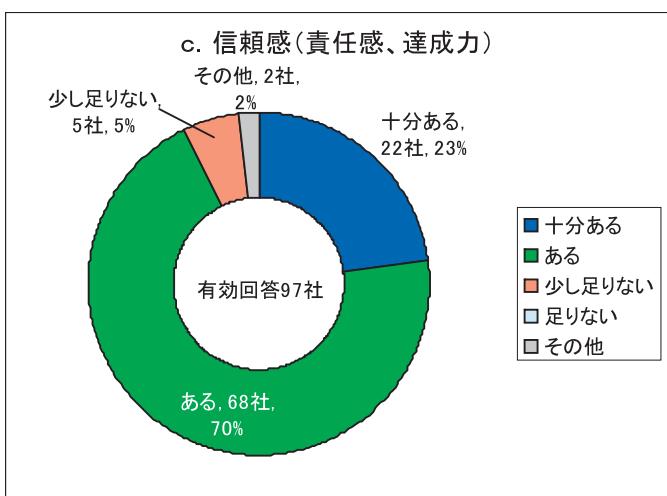
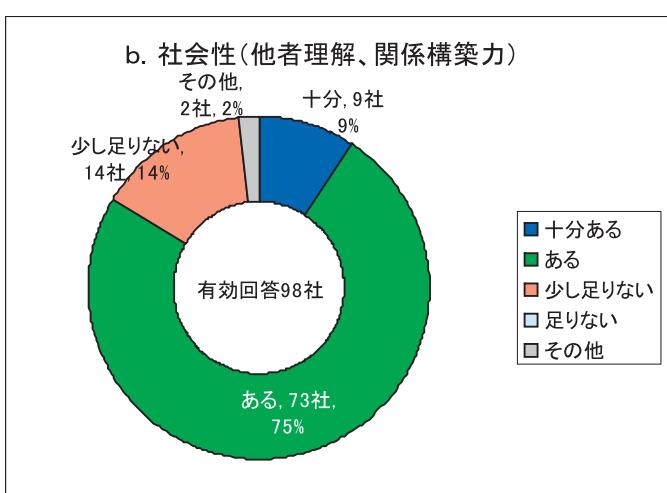
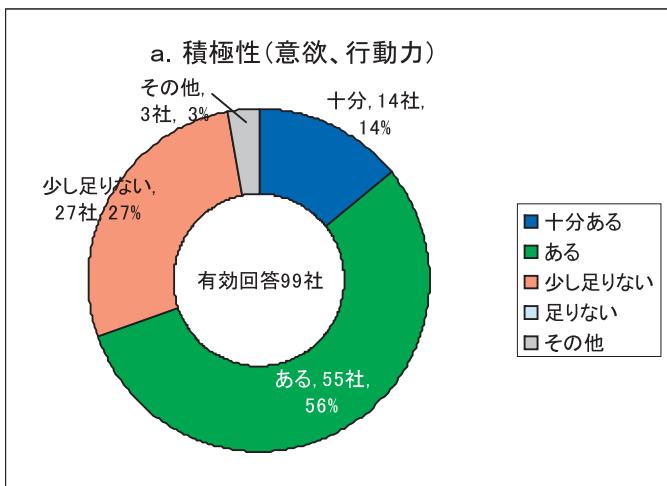
学部	就職希望者	就職内定者	内定率
人文社会科学部	164	140	85.4%
教育学部	179	111	62.0%
工学部	268	255	95.1%
農学部	170	157	92.4%
計	781	663	84.9%

企業訪問活動

今年度も、就職担当教職員延べ30名で、延べ25日間をかけ、東北6県の企業147社を訪問しました。今年は、就職支援部門会議で企業アンケートの設問項目について時間をかけて検討し、特に岩手大学卒業生の印象をコンピテンシー評価項目について聞くこととした。その結果、以下の円グラフのような結果が得られました。

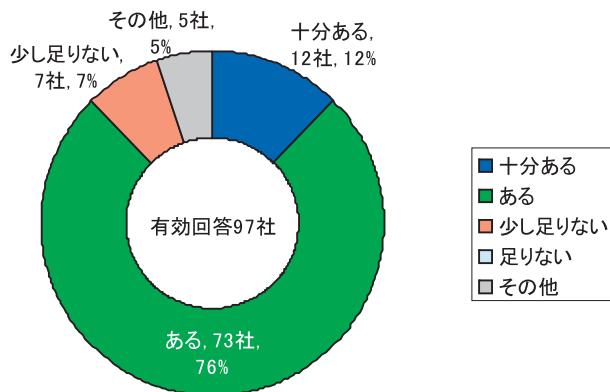
このグラフから、岩手大学卒業生が全般的に高い評価を受けていることが確認できる一方で、積極性と社会性、コミュニケーション力においては、少し足りないと感じている企業が少なくないことがはっきりと現れています。すなわち、積極性では、27%、社会性では14%、コミュニケーション力では23%が「少し足りない」

岩手大学学生の印象(コンピテンシー評価項目)



就職支援部門

d. 経験学習力(課題の認識、経験の適用)



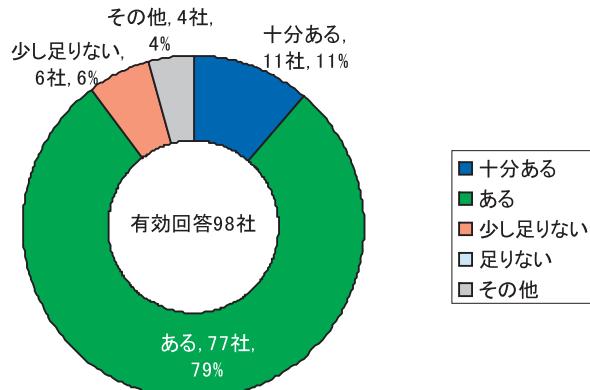
「足りない」と回答している。

さらに、自由記述にも同様の指摘は少なくなく、中には県立大学と比較して評価しているものもある。例えば、盛岡市の情報関係の企業は、「岩大生と県立大生をほぼ半数採用しているが、印象として、岩大生はおとなしい、口べた、県立大は1年生から発言(発表)する機会を多くするように配慮しているからか。」としており、同じく盛岡市の企業は「岩大生と県立大生を比較すると、岩大生はおとなしい、面接でも熱意が伝わらない、男性が特に元気がないように思う。」と答えています。

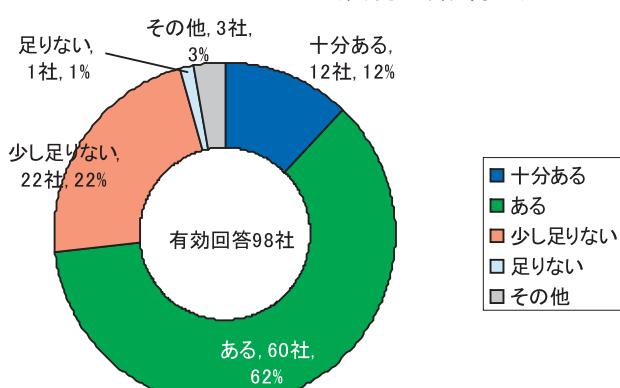
企業合同説明会

今年度も2月28日から3月2日までの3日間、中央食堂を会場に企業合同説明会を実施します。午前・午後の入れ替えで353社がブースを構えて学生との面談に応じます。今年は、この業務を生協にアウトソーシングして大幅な業務の合理化を行いました。来年度は、開催時期を9月、12月、2月の3回に分けて実施し、公務員や教員試験で結果を出せなかった学生や、金融機関などの求人の早い業種にも対応する体制を作りたいと考えています。

e. 自己統制(情緒安定性、統制力)



f. コミュニケーション力(表現力、説得力)



現代GP：各学部の特性を生かした全学的知的財産教育

教育評価・改善部門 福永 良浩

18年度の活動と来年度の課題

岩手大学は、環境教育と連携し全学的知財教育に取り組んでいます。また、具体的な教育プログラムは、各学部の特性を生かして考えられており、農学部・工学部では研究成果を活用しビジネスに結びつく実務的能力の涵養、人文社会科学部では法制度の実務的・法律的理解を深め弁理士へのチャレンジを可能な内容、教育学部では附属小学校等での教育実習を通じて子供に知財教育する方法を開発します。

さらに、1年次の全学共通教育から4年次の専門教育まで段階的に知的財産教育を進めることを目指しています。

新設科目の開講

昨年度の調査や準備検討会を踏まえて「知的財産入門」、「知財ワークショップ」、「特許法特講」、「著作権法概論(放送大学)」の新設科目を開講するとともに、引き続き環境問題と知財教育との連携について調査、検討を行ってきました。

知財ワークショップ

学生が、自らの足で地域(遠野・松尾・葛巻)での実際の生活の場、生産・消費の現場に赴き、自らの



は「自らの生活力の再発見・構築」を図っていく、そのきっかけづくりがこのワークショップに期待されるものであり、また現代社会のニーズと制約のある世界での自己啓発の一つとして知財教育を行ってきました。

[遠野]…知財とは何か。遠野の民話は知財か。遠野の民話(等)に関連させた商品開発は生

目で、見慣れたはずの風物から人間の英知・創造を見抜き、自らの頭脳で財産として再構成する道を探る、つまり

まれているか。また知財が地域の活性化に結びついているか。

[松尾]…処理技術の確立過程にどんな課題があるか。処理技術を巡る特許の実際を知る。

[葛巻]…葛巻の商品開発はどのような環境の下で生まれたか?環境保全型のビジネスや開発の実際を見て、将来の開発モデルになりうるか考える。また、葛巻ワインのラベルを介して、商法の課題を具体的に検討する。

特許庁や民間企業知財部などの現場研修のシミュレーションの実施

知識の取得に偏らない実践的な知的財産教育の開発の観点から、東京の特許庁や民間企業知財部(東芝)、特許事務所(鈴江)、知財高等裁判所などを訪問し、現場を実際に見たり聞いたりすることで、どのような教育効果を期待できるかを検証している。



学生は知的財産を具体的に扱う職場を実際に見聞いたことで、知財の難しさや初めての分野

に深い関心を示していた。

今後の課題

平成19年度開講に向けて「知的財産教育論」の準備を進めているところです。また、全学的な知的財産教育の普及を、全学共通教育の“情報基礎”的「著作権と情報」や“市民生活と法”的授業科目の「特許交渉と紛争の現場」というテーマで1講義を計画をしています。担当の教員にはいろいろと授業の工夫もあるでしょうが、ご協力の程よろしくお願ひいたします。

現代GP: 持続可能な社会のための教養教育の再構築 「学びの銀河」プロジェクト

センター長 玉 真之介

18年度の活動と来年度の課題

ヒューマン・デベロップメント

「学びの銀河」プロジェクトは、10月からESD推進委員会が中心となって活動を進めています。活動の柱は、連続的なESD銀河セミナーの開催です。10月の第1回は、文部科学省の澄川さんと埼玉のESD活動家の長岡さんという対照的な取り合わせでした。11月の第2回は、東京学芸大学の多摩川をテーマとした取組、12月の第3回は、ドイツから池田さんを招聘して、森をテーマに開催しました。

こうしたセミナーを通じて、ESDの中心テーマは「人を創ること」、すなわち、ヒューマン・デベロップメントであることが明確になってきました。本学の共通教育は、人間を中心に置いて「人間と文化」「人間と

社会」「人間と自然」で構成されてきました。ESDはその中心にある人間のイメージを尊重の価値

観を持って持続可能な社会を創っていく人と明確にするものと言うことができます。

第4回のバドル・エジプト大使の講演会も教育の重要性とmutual respect towards humanity をテーマとするものでした。こうしたESD銀河セミナーの記録は、『ESD銀河リポート』に収録して、多くの人に目を通していただけるようにしたいと考えています。

世界の大学におけるESD

本学の取組は、サステナブル・デベロップメントのための高等教育に焦点を当てているところに特色があります。東大はサステナビリティー連携機構を北大は「持続可能な開発」国際戦略を展開していますが、いずれも研究が主体です。国内のNPOの取組は、初等中等教育や地域における生涯教育に重点

をおいたものが中心です。その意味で、大学生を対象に「21世紀型市民」育成の教育プログラムとしてESDを進める本学の取組は、日本国内ではきわめてユニークな存在です。

しかし、目を世界に転じると、それは決してめずらしい取組ではなく、1992年の地球サミット以来、特に北米やヨーロッパで本学と共に問題意識をもった取組があることがわかつてきました。今年度は、フランス、韓国、タイ、そしてイギリスに視察調査を行い、関係を作ることができました。その成果をもとに、8月末には、国際シンポジウムを開催します。その際のテーマは、アジアの大学間でESDのネットワークを作ることです。

高年次教養科目と小中高大連携

ESDは、地域が抱える具体的問題に取り組むこと実践性を追求する教育です。平成19年度からは盛岡市の男女共同参画計画や高松の森の自然再生などをテーマとした高年次教養科目が開設されます。

また、上田地区の上田小学校、上田中学校、杜陵高校、盛岡一高と、通学路の安全マップづくりや環境教育、防災教育などをテーマとする小中高大連携も平成19年度には取り組んでいきます。「学びの

銀河」を旗印に、世界と地域に翼を広げた教育が展開されいくことを期待しています。



放送大学活用研究プロジェクト：報告と予定

教育評価・改善部門長 後藤 尚人

* 18年度：実施報告

岩手大学と放送大学は、昨年度に引き続き「単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト」として、岩手大学における教育環境の問題点を、放送大学岩手学習センターを活用することでどの程度解消できるのか、また、そのためには何が課題となるのかを検証するため、平成18年度に以下の6科目（科目表記は「岩手大学科目名 / 放送大学科目名」）を開講し、全ての科目について科目履修生として本学の学生に受講してもらつた。

- * 「初級韓国語（入門） / 韓国語 I ('06)」（テレビ） [前期：共通基礎科目：39名]
- * 「文化論特講 I / 芸術・文化・社会 ('06)」（テレビ） [前期：専門科目：41名]
- * 「初級韓国語（発展） / 韓国語 II ('06)」（ラジオ） [後期：共通基礎科目：39名]
- * 「著作権法概論 / 著作権法概論 ('06)」（ラジオ） [後期：教養科目：10名]
- * 「文化論特講 II / マスマディア論 ('06)」（ラジオ） [後期：専門科目：4名]
- * 「建築文化論 / 建築意匠論 ('04)」（テレビ） [後期：専門科目：1名]

* 19年度：実施予定

平成19年度は17、18年度の反省点を踏まえ、以下の科目をプロジェクトとして開講する。

岩手大学&放送大学岩手学習センター：単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト：平成19年度（案）

放送大学の科目をどのように活用することが望ましいのかを検証するため、以下の科目をプロジェクト対象科目とする。（受講者数200+20名）

科目分類 科目名（岩手大学）	科目分類 科目名（放送大学）	メディア	受講者数	学期	利用形態	受講曜日時間	活用目的	活用理由等	補助教員等
共通基礎：外国語 「初級韓国語（入門）」	共通：外国語 「韓国語入門 I ('06)」	テレビ	20	前期	科目履修生	月5・6 木5・6	担当者不足の解消	韓国語の担当者不足の解消	岩手大学 河 京希
教養：人間と文化 「人類の歴史と地球の現在」	共通：一般：人文系 「人類の歴史・地球の現在 ('07) —文化人類学へのいざない—」	テレビ	30	前期	科目履修生	水9・10	カリキュラムの充実	ESD関連（現代GP） 科目的充実	岩手大学 後藤 尚人
教養：高年次課題 「高年次課題特別講義 I」	専門：発達と教育 「岐路に立つ大学 ('04)」	テレビ	20	前期	コンテンツ利用	集中	カリキュラムの充実	ESD関連（現代GP） 科目的充実	岩手大学 江本 理恵
専門：人社：国際文化 「文化論特講 III」	専門：人間の探究 「芸術・文化・社会 ('06)」	テレビ	30	前期	科目履修生	火7・8	担当者不足の解消	人文社会科学部で不足している分野の補充	岩手大学 TA
専門：人社：国際文化 「文化記号論 III」	共通：一般：人文系 「現代思想の地平 ('05)」	ラジオ	15	前期	科目履修生	水7・8	カリキュラムの充実	人文社会科学部での文化論関連科目的充実	岩手大学 後藤 尚人
共通基礎：外国語 「初級韓国語（発展）」	共通：外国語 「韓国語入門 II ('06)」	ラジオ	20	後期	科目履修生	月5・6 木5・6	担当者不足の解消	韓国語の担当者不足の解消	岩手大学 河 京希
教養：人間と自然 「数理のひろがり」	共通：一般：自然系 「数学再入門 ('07)」	テレビ	25	後期	科目履修生	木3・4	担当者不足の解消	数学分野の担当教員不足の解消	岩手大学 福永 良浩
教養：人間と社会 「著作権法概論」	専門：社会と経済 「著作権法概論 ('06)」	ラジオ	15	後期	科目履修生	水9・10	カリキュラムの充実	知的財産関係（現代GP）科目的充実	岩手大学 後藤 & 佐藤
専門：人社：国際文化 「文化論特講 IV」	共通：主題 「表象としての日本 ('04) —西洋人の見た日本文化—」	テレビ	30	後期	科目履修生	火7・8	担当者不足の解消	人文社会科学部で不足している分野の補充	岩手大学 TA
専門：人社：国際文化 「文化記号論 IV」	専門：産業と技術 「情報技術と社会 ('05)」	テレビ	15	後期	科目履修生	水7・8	カリキュラムの充実	人文社会科学部での文化論関連科目的充実	岩手大学 後藤 尚人

Iⁿ Assistant(アイアシスタント)

教育評価・改善部門 江本 理恵

* Iⁿ Assistant(アイアシスタント)とは?

アイアシスタントとは、シラバスと授業記録、いわゆる LMS（授業支援システム）の機能を一体化させたシステムです。今までのシラバスが、学生にとって「履修申告前に見るもの」「履修申告以後は見ないもの」、教員にとって「前の年の1月頃に書くもの」という一時期のみ活用されるものだったとすれば、アイアシスタントは、授業期間中を通して教員と学生が双方向的に活用することを目指した総合的な学習支援システムです。

* Iⁿ Assistant(アイアシスタント)の特徴

アイアシスタントには、①授業の進行に応じた情報提供を行う基本機能、②教員と学生間の双方向性の実現や教室外学習の支援を行う拡張機能、③使い勝手を追求したポータル機能が用意されています。

①基本機能

基本機能として、シラバスと授業記録があります。シラバスは、学生に対して履修申告時に必要な授業科目の情報を提供すると同時に教員が授業設計を行うためのものだと考えられます。そこで、シラバスは学生の履修申告期間前までに入力し、それ以降は変更できません。では、授業期間中はどうするか？それが「授業記録」です。授業記録では、授業の進行状況を記録したり、今後の予定を書いたり、授業で使ったプレゼンテーションファイルや配布プリントを登録したりできます。ここから②の拡張機能の i カードや課題・レポート等の出題もできます。

②拡張機能(LMS)

拡張機能として、いわゆる LMS（授業支援システム）に該当する機能を用意しました。学習支援、コミュニケーション、グループ作業などの機能があります。

③ポータル機能

「使い勝手」を良くするために、今回、徹底的にこだわったのが「情報が集約されているトップページ（ポータル）」です。ログインして最初に表示されるポータル画面は、必要な情報が一目でわかり、かつ、ワンクリックで必要なページへアクセスできるように設計されています。教員には、自分の担当科目が時間割に表示され、学生には、履修している授業の時間割が表示されます。学生から何らかの反応があった（課題が提出された、など）場合には、教員の時間割上にアイコンが表示されます。

* Iⁿ Assistant(アイアシスタント)の運用

もう1つ、「使い勝手」の良いシステムを目指してこだわった点は、本学の学務情報システムや認証システム、図書館、大学情報データベース等との連携を行うことです。これらの学内他システムとの連携を行うことができたので、例えば、アイアシスタントを使う教員は、自分の担当している授業を登録する、履修者を登録する、時間割を登録する、自分の名前や所属学部を入力する、などの作業をしなくとも、ログインすれば、前述したような既知の情報が自動的に表示されます。

* Iⁿ Assistant(アイアシスタント)

説明会・講習会

平成19年度からの本格稼働にむけて、平成18年7月、8月、9月、平成19年1月に、各学部の教室や端末室にて、アイアシスタントの説明会や講習会を開催させていただきました。次は、3月末から4月上旬にかけて、アイアシスタントを授業で積極的に活用するための「学習支援」機能部分にターゲットを絞った講習会等を予定しています。お誘い合わせの上、ぜひ、ご参加ください。



アイアシスタント教員用トップページ

編集後記

☆今年は暖冬で雪が積もらないことを祈っておりましたが、編集中にドッサリとそれも
湿った雪が沢山積もりましたが、すぐに解けてしまいました。少し寂しい気もしますが、
春に向けて新たな気持ちでスタートです。

☆われわれも学生の動向を常に意識し、社会のニーズに応えられる学生を教育や研究
という中で育成できるよう、岩手大学の大きな銀河でありたい。

福永良浩

erudio 6
2007年3月28日発行



国立大学法人 岩手大学 大学教育総合センター
Iwate University : University Education Center
〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18-34

入試部門
Tel:019-621-6926

学生生活支援部門（学生支援課）
Tel:019-621-6058

全学共通教育企画・実施部門 専門教育関係連絡調整部門
Tel:019-621-6925 Tel:019-621-6925

教育評価・改善部門
Tel:019-621-6924

就職支援部門（就職支援課）
Tel:019-621-6059

(部門共通)
FAX : 019-621-6928
電子メール : uec@iwate-u.ac.jp
Webサイト : <http://uec.iwate-u.ac.jp/>

